

教職員・幼児児童生徒・保護者を応援します！

サポート

No. 213

令和8年2月10日発行

県教育庁特別支援教育課指導チーム

「心のバリアフリー推進モデル地区における障害理解の推進事業」 ～花輪小学校と比内支援学校かづの校との障害理解の推進に向けた取組～

「心のバリアフリー推進モデル地区における障害理解の推進事業」は、小学校と特別支援学校の交流及び共同学習に関連付けた障害理解授業やP T A研修会等の実施により、小学生やその保護者、地域住民の障害理解を推進することが目的です。令和5・6年度は、大仙市をモデル地区とし、今年度からは、鹿角市をモデル地区として実施しています。モデル校である鹿角市立花輪小学校と比内支援学校かづの校は、長年にわたって交流及び共同学習を継続しています。6月に開催した連絡会議では、花輪小学校とかづの校、鹿角市教育委員会の関係者が、本事業の目的達成に向けて、それぞれの立場で取り組むことについて検討しました。



【かづの校手作りの写真ボードを花輪小へ】

今年度の両校の交流及び共同学習は、花輪小学校の3年生とかづの校小学部児童を対象に、10月と11月にそれぞれ1回ずつ行われました。花輪小学校の児童は、事前学習として、両校の先生方が共に準備した障害理解授業を受け、かづの校の児童の学習の様子や好きなこと、得意なことを知りました。また、学習を通して、障害による困難さやそれに対して自分ができることを考え、相手を思いやることの大切さについて学ぶことができました。

1回目の交流では、両校の児童は少々緊張した様子でしたが、かづの校伝統の手話ソング「心の扉」が始まると、事前学習で練習していた花輪小学校の児童も共に手話と歌を楽しみ、一気に打ち解けることができました。2回目の交流では、風船バレーやボッチャ等のゲームを行う中で、戸惑っているかづの校の児童に花輪小学校の児童が積極的に声を掛けたり、一緒に自分たちのチームを応援したりと、相手を思いやりながら共に活動を楽しむ様子が見られました。両校が



【お互いにペースを合わせてのフラフープリレー】

交流及び共同学習学習のねらいを共通理解し、計画的に事前学習や障害理解授業に取り組んだことが、交流の深まりにつながったと考えます。

今年度は、交流及び共同学習の様子について、学校報等を使って保護者との共有に努めてきました。次年度は、保護者等を交えた障害理解授業や研修会などの実施を工夫し、子どもたちの障害理解を地域に広げていきます。

(特別支援教育課 指導主事 齊藤 徹)

インクルーシブの風

このコーナーでは、インクルーシブ教育システムの推進の観点から、各校種等における特別支援教育に関する取組や交流及び共同学習の様子などを紹介していきます。

「通級による指導実践研修」は、提示授業に基づく協議等を地域の通級による指導担当教員を含めて実施することにより、担当教員の実践的指導力の向上とともに、対象児童生徒の在籍学級担任との連携や地域の特別支援教育の推進を図る研修です。今回は、船川第一小学校の通級による指導実践研修を紹介します。

子どもが「分かる」「できる」を実感できる指導～男鹿市立船川第一小学校～

◎対象児童（2年生）の実態

数字を見てその量をイメージすることや簡単な暗記が苦手である。

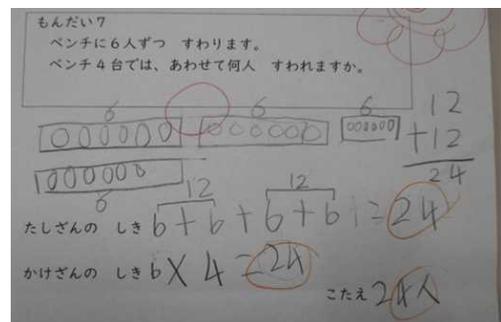
◎指導の目標

- ・学習活動に対する意欲の向上を目指す。（参考：自立活動の内容「心理的な安定」）
- ・問題文の内容に合う図を書くことで、言葉の式と問題文の数が一致すると分かる。（参考：自立活動の内容「環境の把握」）

◎指導の工夫

- 1 通級による指導においては、「特に必要があるときは、障害の状態に応じて各教科の内容を取り扱いながら行うことができる」とされています。算数の学習での困難さが大きい児童が、授業に安心して参加できるように、在籍学級の担任と学習進捗についての情報交換を行い、本人が**つまずきやすいポイントを事前に抽出**して学習方法を身に付けられるようにしていました。
- 2 提示する情報を精選するとともに、説明の言葉や手順、図の提示を同じパターンにする配慮がなされていました。本児が慣れてきたら、少しずつ問題の難易度を上げていくなど、**実態に応じたスモールステップでの指導**がされていました。
- 3 **問題の内容が視覚的に分かる**ように、児童自身が数字と図で表す場面を設定し、一つ分の数を捉えることにつなげていました。
- 4 **同じ数ずつ増えていくことを実感しながら覚えることができる**ように、九九を機械的に唱えるだけでなく、数シートを指差す、九九のカードを置く、唱えながら九九を書くなど、様々な活動を組み合わせた学習を展開していました。
- 5 実践研修における協議を踏まえ、その後の指導では、**量をイメージできる**ように、一つ分の数と幾つ分の数を示した具体的な図を活用していました。

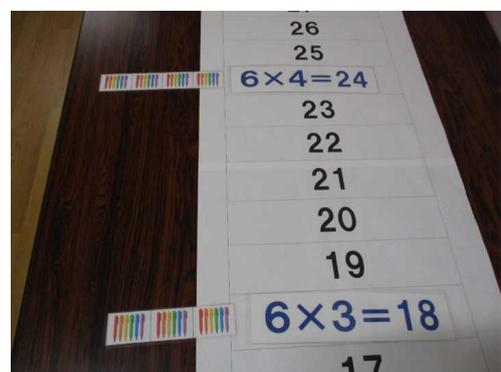
特別支援学級4学級と通級指導教室の担当者が、実践研修に向けて模擬授業を重ねるなど、特別支援教育コーディネーターを中心に特別支援教育部がチームとなって授業づくりに取り組んでいました。また、部内での検討により、個別の教育支援計画や個別の指導計画、学習指導案等の記載内容が具体的になっていました。複数の教員による実態把握や目標及び手立ての設定・評価が、「分かる」「できる」を実感し、キラッと光る児童の姿につながっていた実践でした。



【数字や図で表す工夫（指導の工夫3）】



【数シートを使った音読（指導の工夫4）】



【九九と図の提示（指導の工夫5）】

特別支援学校の特色ある取組紹介

近隣高等学校との同世代交流

～天王みどり学園高等部2年生と男鹿工業高等学校電気電子科3年生との交流及び共同学習～

本校高等部では、男鹿海洋、金足農業、秋田西、秋田工業など、近隣の高校との同世代交流を継続しており、10年以上続く、本校の特色ある教育活動の一つです。今回は、男鹿工業高等学校との交流について紹介します。

交流に向けては、事前に男鹿工業の生徒の障害理解を深めるために本校センター的機能の活用による「心のバリアフリー授業」（障害理解授業）を実施しました。また、同校の玄関ホール付近をお借りし、交流前後2週間、本校の教育活動を伝える巡回学校展を開催しました。

12月11日（木）の当日は、両校の学校紹介から始まりました。続いて、男鹿工業の生徒がスライドで再生可能エネルギーについて解説してくれ、後半はソーラーミニカーの共同製作に挑戦しました。太陽光発電の仕組みや脱炭素の可能性について、ペアによる実際の製作を通して学ぶ貴重な機会となりました。

交流後、本校生徒からは「工業高校の学習は、作業学習と少し似ている」「一緒に作れてうれしかった」、男鹿工業の生徒からは「教え方に悩んだが、集中力に驚いた」という感想が寄せられました。校種の枠を超え、同じ地域で学ぶ高校生同士が互いの学びを知り、新たな発見や学びが生まれた交流となりました。

卒業後に向けても、地域社会を共に担う一員であるという意識が双方に育まれることを願い、今後もこの交流を大切に続けていきます。（支援学校天王みどり学園 教諭 神田 純一）



【学校紹介】



【ソーラーミニカー作り】

特別支援学校の特色ある取組紹介

通常の学級における難聴理解学習の取組 ～ 聴覚支援学校 ～

本校では、小・中学校等からの依頼を受けて難聴理解学習を行っています。今年度は20校から依頼がありました。ここでは、秋田市立泉小学校5年生の事例を紹介します。

泉小学校の5年生には、通常の学級に難聴児童が1名在籍しています。クラス替えに伴い、改めて学年全体の難聴理解を図りたいという保護者の声がかきかけで依頼がありました。そこで、本人や保護者の思いを確認した上で、同じ学級の児童の音環境への意識等についてアンケートで情報を得て、学習内容に反映させました。

当日は、補聴器についての説明や聞こえにくさの疑似体験を通して、伝え合う際の工夫について考えました。授業の終盤では、難聴児童が1人で書き上げたメッセージを、緊張しながらも友達や先生に伝えることができました。この経験が難聴児童の自信となり、現在、グループでの話し合いでは自らロジャーマイク*を友達に向けるなど、友達の発言をしっかりと聞いて授業に参加しています。

その後、泉小学校では、在籍する複数の難聴児童への支援について職員研修も実施し、「全教職員で難聴児童の支援に努めたい」「本人とよく相談しながら安心して学習や生活していけるようにしたい」といった感想をいただいています。

今後も周囲の理解に基づく難聴児童の学びやすい環境整備に向け、担任はじめ特別支援教育コーディネーター等との連携を密にし、発達段階等に応じた難聴理解学習の在り方を検討・実施していきたいです。（聴覚支援学校 教諭 照井 純子）

*ロジャーマイク：補聴器や人工内耳を使用する方が、補聴援助システムを使用するために使用するマイク



【5年生の様子】

授業中にいすの音としゃべっている声が大きく、先生の声が聞こえにくいことがあります。だから、いすを動かしたりしゃべったりするのは、なるべくさけてほしいです。発表の時などに、大きい声で話してくれていることに感謝しています。先生には、はっきり話してくれて、大きな字で黒板に書いてくれることに感謝しています。みんなといっしょに授業を受けたり、遊んだりするのが楽しいです！これからも、いっしょにがんばりましょう。

【難聴児童のメッセージ】